

「クマモト」をキーワードにインタビュー。「3040」だから語ってくれる話題の人の今、そしてこれから

PERSON'S FILE

市職員から市長へ。今年4月に行われた上天草市長選で当選した川端祐樹さん、35歳。我々3040と同世代の彼がなぜ市長を志したのか、そして行政の長として、どんな思いでまちづくりを進めるのかを聞いた。

4年間でどれだけ市民のために働けるか。 大きな期待に応える仕事をしたい。

上天草市長 川端祐樹

■プロフィール／かわばたゆうき。1971年、東京生まれ。前市長の辞職に伴って行われた市長選で、二代目上天草市長に就任。以前から続けている中学生へのソフトテニスの指導にも力を注ぎたいが、公務でなかなかできないのが悩み。



今年4月、熊本に九州で最年少の市長が誕生した。新上天草市長・川端祐樹さんは、1971年生まれの35歳。合併前の大矢野町時代から約10年間勤めた市職員を退職し、「現場で行政の変遷を見てきた自分が一助になれば」と出馬を決意。一職員から首長となった今、新しい仕事場は、彼が最後に在籍した総務課の目と鼻の先にある。取材に対応してくれた総務課の女性職員に尋ねると、市長室のドアはいつも開放されているらしい。

父親の仕事の関係で東京で生まれ、小学3年生の時に両親の故郷である天草へやって来た川端少年は、恵まれた自然の中で思う存分遊んだ。青い海と空を眺めながら、「将来はパイロットになりたい」という夢を抱いていた一方で、親族から県議や町の助役を輩出した家系だったこともあり、政治や選挙が身近な存在だったという。

「選挙で家が動いているという感じでした。ただ、当時はもちろん、市職員として仕事をしながらも、自分が政治にかかわるなど考えてもいませんでした。今思えば、そういう運命を背負っていたのかもしれませんね」と微笑む。

さまざまな経験の中で 意思決定能力を磨く

曰く「おとなしくまじめだった」彼に変化が訪れたのは高校生時代。『思考は現実化する』という本を読んだんです。自分の考えを主張するようになったのはそれから。この頃から、経営者になりたいという思いが強くなっていきまし

た。高校入学と同時に親元を離れ、大学進学後はイギリスへ留学。さらに学生時代のアルバイト先では人生の師と呼べる経営者と出会う。

「組織をマネジメントする人間はどうあるべきかを教えてもらいました」。そして卒業後は証券会社に就職し、株式取引の現場で瞬時に判断する訓練を積み、経営者としての資質を磨いていった。こうした経験が図らずも、市長の仕事にも生かされている。「常にさまざまな意思決定をしないといけない。悩むこともありますが、個人的な感情は捨てて、組織としてどうあるべきかを考えるようにしています。これは企業経営でも同じだと思います。『小善は大悪に通じ、大善は非情に似たり』という哲学で、首長としての判断を下していきたい」と話す。

若い世代が これからの社会を作る

市長として課せられた使命は、財政再建と過疎化の解消。「上天草市は豊かな自然と食材に恵まれた場所です。これをどうプロデュースして、地域の経済発展につなげ、住み良い市にするか。年配の市民の方はもちろん、同世代の方からの期待も大きく感じます」。

近年、20〜30代で選挙に立候補する若者が増えていますが、これについての見解はこうだ。「戦後の復興を経て今の繁栄があるわけですが、ある程度ピークに来て、熱意が冷めている状態ではないでしょうか。そういう意味では、今の日本は黎明期とも言える。将来を担う私達の世代が、より良い社会をつくるという意識を持ち始めたことで、政治家が若返っているんだと思いますね」。

**私心を捨てて、
市民のために働く**

最後に、自らの10年後にどんな展望を持っているか聞いてみた。「それは全く考えていません。4年という任期の間でどれだけ市民のために働けるか。市長という立場に立った以上、私心で人生設計はできませんからね」。

これから4年で上天草市がどう変わるのか。「思考が現実化する」ことを、身をもって体験してきた若き首長の手腕に期待は膨らむ。



千歳山から望む松島の絶景！この豊かな自然を生かした市長の戦略とは？